

なごみつうしん

発行日：平成 29 年 3 月 27 日（第 27 号）

発行：島田療育センターはちおうじ

「いのちの授業」を終えて、先生も感想を書いてくれました。日々、接している生徒の「いのちの物語」を先生も改めて感じてくれました（その2）。

所長 小沢 浩

・私の心を揺さぶったのは、冒頭でスクリーンに映し出された『言葉たち』でした。

当たり前の毎日の中でくり返し出会う人が、自分たちにとって掛け替えのない大切な存在であることを改めて思い知り、目頭が熱くなりました。私たちがこの世に生を受けたとき、家族はどれほど喜んだことでしょうか。インタビューによって親の思いを知ったどの子どもも最後に「ありがとう」という感謝の言葉を添えていました。

私には後悔していることが一つあります。父親に『今まで本当にありがとう』という感謝の言葉を伝えられなかったということです。父が急性骨髄性白血病という病と向き合い、告知をせずに闘病生活を始めた時から私は父親に対して「ありがとう」という言葉を口に出来なくなりました。その言葉が病気と必死になって闘っている父に対して、病にはもう勝てないのだよ、という諦めの意味にとられかねないという不安があったからです。



私の父が他界して 17 年が経ち、先日法要を済ませて亡き父を偲びました。私は、墓石の前に立つと手を合わせ、心の中で「ありがとう」と唱えます。そして、母に家族に「ありがとう」って口にする日々をこれからもずっと過ごしたいと思います。

・「いのちの授業」のお話をうかがい、感動の連続で涙が出ました。私にも中1の娘がいますが、なかなかチャンスがなくて、出生前後の話を本人とじっくり話したことがありません。生徒の作文を見て、同時に先生のお声で読み上げて頂き、我が子だったらどのような文になるのかなぁと思いました。これを機会に話してみようとも思いました。

また母親として、私自身もこの13年間の子供の成長、そして自分を振り返ることができました。



（奇跡がくれた宝物 クリエイツかがわ より）